
バカと色付き眼鏡と召喚獣

松竹梅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと色付き眼鏡と召喚獣

【Nコード】

N8304X

【作者名】

松竹梅

【あらすじ】

文月学園に通うサングラスをかけた主人公、鈴風松也^{すずかぜしんご}。観察処分者^{くわんさつじょぶん}の吉井明久とは幼稚園からの姫路瑞希とは小学校からの幼なじみであり、姫路瑞希とは一年生の春休みから恋人同士となった。これはそんな彼と仲間達の青春学園コメディである。

第一話（前書き）

はじめまして、作者の松竹梅です。

小説を書くのははじめてですが、暖かく見守って下さい。

第一話

校舎へと続く坂道。

桜の花が咲き乱れた並木道を

俺は全力で走っていた。

しかも一人背負って、

「ハッ！ハッ！、たくっ！寝坊するなよ瑞希！」

「す、すみません！今日から新学期だと思つと緊張してしまつて…」

「とにかく急ぐからな！」

オレ、鈴風松也は幼なじみ兼恋人である、姫路瑞希を背負い坂道を走っていた。

何故背負っているかつて？

彼女は体力がないからだ。

「遅刻だぞ！鈴風！姫路！」

学校に着くと校門のところにはひとりの教師がいた。

「おはようございます！西村先生、遅刻してすみません！」

「おはようございます！西村鉄人先生、今日も暑苦しいですね？」

「鈴風？今、名前を鉄人と呼ばなかったか？それに暑苦しいは余計だ！」

「気のせいですよ」

「……まあいい。ほら。」

鉄人は二通の封筒をそれぞれに渡した。

「二人とも惜しかったな……。俺が試験官ならなんとかしたんだが」

「き、気にしないで下さい。あれは私の不注意で…」

「そうだぜ、てっちゃんが落ち込むことないって」

「誰がてっちゃんだ！」

「まあいい、よし、急げ！HRは始まっているぞ！」

「はいよ！いくぞ瑞希！」

「は、はい失礼します！」

こうして二人は急いで教室に向かった。

「今更だがなんでアイツは姫路を背負ったままだったんだ？」

二人は玄関に着いてからそのことに気づき、姫路は顔を真っ赤にしていたが、松也は気にすることなく姫路を連れて教室へと向かった。

第一話（後書き）

初めっから、やっちゃいました。

勢いで書きましたが、このあとどっしりよ...

感想待ってます！

第二話（前書き）

更新が遅れてしまった…

たぶん、不定期更新になるのでよろしく

第二話

オレと瑞希は教室の前まで来たのだが、

「おい、瑞希。本当にここか？」

目の前には、廃屋と言っても差し支えないモノがあった

「と、とにかく入ってみませんか？」

姫路の反応がぎこちないが入ることにした

「すみません。遅れました」「

『…え？』

クラスの奴らは俺と瑞希が入ってきて驚いていた。

いや、『オレと瑞希』にではなく、『瑞希』にだろう。

なんせ、瑞希は学年二位の才女なのだ。

「丁度良かったです。今、自己紹介をしているところなので姫路さんと鈴風くんお願いします」

「はい、姫路瑞希です。よろしくお願いします」

『はい、質問です』

「は、はい、なんででしょうか？」

『なんでここにいるんですか？』

聞きようによってはかなり失礼な質問だが

まあ、しょうがないだろう

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしまいました…
…」

『『『ああ』』』

なんか全員（一部をのぞいて）納得していた

『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ、化学だろ？ あれは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて』

『黙れ1人っ子』

『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』

『『『異端者だ！』』』

『すみません！調子こきました！』

………予想以上のバカ共だ………

「次に鈴風くんお願いします」

福原先生がオレに呼び掛けた

（次はオレか、ここは一発やっとか）

「え、鈴風松也です。一つ言っときますが姫路瑞希はオレの彼女で…」

『『『異端者だ!』』』』

カチャ（サングラスをはずす音）

ギロツ!!（男子生徒を睨む）

…もし手を出したら命の保障はありません。

…分かりましたか？」

『『『イ、イエス サー!』』』』

カチャ（サングラスをかける音）

（これでいいだろ）

「こ、これから一年よろしくお願いします」

「よろしく」

交際宣言を聞いて姫路は顔を赤くして後ろの席に向かい、松也もそのまゝ後ろに向かった

第二話（後書き）

主人公、一睨みでクラスメイトを黙らせる W W W W W

いつまで効くのやら……

第三話

後ろの席に向かうと見知った顔があった

「よう明久、おはよう」

「おはよう、松也に瑞希ちゃん」

「明久くんおはようございます」

この男子生徒は吉井明久といい、オレと姫路の幼なじみでありこの学年きつてのバカだ

……前までは

「二人とも残念だったね」

「お前こそ遅刻しなければ、もうちょっと上のクラス狙えただろうにな」

「あはは、いろいろあってね」

ちなみに、後から明久から聞いた話だと

道端にうずくまっていた女子を見つけ急いで病院まで運んでいき、

学校に向かったが遅刻してしまっただとか、

それを聞いた西村先生や学年主任の高橋先生などが再試験ができるよう掛け合っていたが、

教頭などが『これは校則である』ということで、結局再試験を受けれずにFクラスとなったわけだ。

「おいおい、明久がFクラス以外で行けるクラスなんてあるのか？」

明久と会話をしているとゴリラが話しかけてきた。

「誰がゴリラだ！」

「雄二、何叫んでるの？」

ゴリラもとい坂本雄二がいきなり叫んだことに明久は不思議そうな

顔をしていた

「なんだ雄二知らないのか？こいつ三学期になってから瑞希とオレで勉強を教えて、今はDクラス上位くらいの成績はあるぞ？」

「全く、嘘はほどほどにしろよ」「いや、ほんとただけだな……」

「やっぱり信じてもらえないか……」

「あはは……」

松也が明久の成績が上がっていることを告げても雄二は信じてなく、明久は溜息をはき、姫路は苦笑いをしていた。

パンパン！

「はいはい。その人たち、静かにしてください」

「あ、すみま

バキィッ！ パラパラパラ……

せん？」

「ええ。代えを持ってきますので、少し待っていてください」
「気まずそうに先生は教室から出ていった。」

…

…

………よし

「おい、ゆ『雄二、ちょっといい?』………」

松也が雄二を呼ぼおとしたところ、明久に先に言われてしまった

「なんだ明久？」

「ちょっと話があつてね。廊下の方で話そう。松也も来てくれる?」

「ああ、いいぞ」

明久達は廊下の方で話をすることにした

「……私はどうしたらいいんでしょう。」

おいて行かれた姫路は、一人寂しく待つこととなった

第三話（後書き）

明久の成績が上がっているwww

成績は上がったが大丈夫だろうか？

第四話（前書き）

連続投稿です！

それではどうぞ。

第四話

「それで話ってなんだ？」

「この教室のことだけど」

「Fクラスか？想像以上に酷い所だな」

「Aクラスは見た？」

「まだだが……」

「ああ凄かったな。あんな教室は見たことないな」

オレが見ていないと言っていると雄二が見たときの凄さを言った。

「そんなにか？」

「個人でエヤコンや冷蔵庫が使えて、座席はリクライニングシートだぞ？」

「……………」

あまりの凄さに何も言えなくなった

「そこで僕からの提案、『試召戦争』をやってみない？」

「戦争だと？」

「うん！しかもAクラス相手に」

「・・・何が目的だ？」

「いや、え」と

「嘘を言つな」

「正直に話せ」

あまりに酷い設備だからって、なんで、先にそんなこと言うの！

「勉強に興味がないお前に設備なんて関係ないだろ」

「それにお前は『試験校だからこそその学費の安さ』に惹かれたんじやなかったか？」

「あーえーつとそれはその・・・」

雄二とオレが追求すると明久は戸惑い始めた

「瑞希のためなんだろ？」

「う、うん、そうなんだ」

「まあ、オレも雄二に頼もうとしていたしな」

「気にするな。俺もAクラス相手に試召戦争をやるうと思っていてところだ」

「え？雄二も？」

「何でお前が試召戦争をやるうと思ったんだ？」

「世の中、学力が全てじゃないって証明を試してみたくな。」

それにAクラスのための秘策も思いついた」

そういうと雄二は教室に入って行ったので松也と明久も教室に入っ
た。

「坂本君、キミが自己紹介の最後の一人です」

「了解」

魂の叫びだった

「だろう？ 俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二が同意すると、あちこちから不満の声があがり始めた

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！ 改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！ あまりにも差が大きすぎる！』

『そつだそつだ！』

『理不尽だ！』

「みんなの意見はもつともだ。そこで、これは代表としての提案なんだが」

自信たっぷりの野生味溢れる笑顔で言った。

「Fクラスは、Aクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思
う」

第四話（後書き）

ついに、遂に、戦争をしかけます！

楽しみにしてください

第五話

雄二の、いきなりの提案。

それに対し、クラスメイト達は非難し始めた

『勝てるわけがない!』

『これ以上設備が落とされてたまるか!』

『姫路さんが居たら何もいらぬ!』

(誰だ瑞希にラブコールを送ったのは?.....ぶっ飛ばしてやる
いや、それ以上の.....)

松也が黒いオーラを出し始める

「そんな事はない、必ず勝てる。いや俺が勝たせて見せる」

『無理に決まってるじゃん』

『そう言われても何の根拠もないしな』

「根拠ならあるぞ。」

このクラスには勝つことのできる要素が揃っている」

雄二は自信ありげにそう宣言した

「それを今から証明してやる！」

おい康太、いつまで姫路のスカートを覗いてないでこっちに来い」

「……………!!」

そついうと康太と呼ばれた青年は素早く立ち上がり首を横に振った

「はわぁ!?!」

姫路は見られていた事に顔を朱くし、スカートを押さえた

「土屋康太 こいつがああの有名な寡黙なる性職者だ」
ムッリーニ

そついうと康太は首を横に振った
ムッリーニ

『馬鹿な……………奴がそつだというのか?』

『だが見る！まだ証拠を隠そうとしているぞ……………』

『ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ』

ムッツリーニとは、男子から畏怖と畏敬を女子からは軽蔑をもって
言われている名だ

(瑞希のスカートを覗くとはな……………後でO S H I O K Iが必
要だな)

「それに姫路の事は皆その実力をよく知っているはずだ」

「え？私ですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ期待している」

『そつだ！俺達には姫路さんがいる！』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない！』

『姫路さんさえいれば何もいらな(ドンッ！)ゲホオ！？』

いい加減腹が立ってきたので、殴り飛ばしといた

「それに木下秀吉だっている」

「ワシもか？」

『演劇部のホープだったか？』

『確かAクラスに木下優子っていう姉がいたな』

「当然俺も全力を尽くす」

『坂本って小学校の頃『神童』とか呼ばれてたんだろ』

『確かになんかやれそうな気がしてきたぞ』

『これいけるんじゃないか！？』

教室のやる気が高まっていき

「それに吉井明久だっている」

一気に静まりかえった。

『誰だ吉井明久って』

『そんな奴このクラスにいたか?』

「おい雄二！何でそこで僕の名前をだしの！？せつかく上がった士気が台無しじゃない！だいたい僕は普通の人なんだから普通の扱いをしてよ！」

明久が文句を言うと、雄二が睨み付けてきた。

「そづか、知らないのなら教えてやる。」

こいつの肩書きは『観察処分者』だ！！」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか?』

『確か真のバカに与えられる称号だったハズだな』

「みんなひどいよ！」

明久はクラスメイトからの言葉に泣いていた

「あの〜、観察処分者って何ですか?」

かくして、試召戦争の幕があがった

第五話（後書き）

いよいよ試召戦争がはじまります！

戦闘シーン、上手く書けるかどうか……

余話〱キャラ紹介〱（前書き）

遅くなりましたが主人公の紹介です

新しいことが判り次第、随時更新します

11月10日 更新

余話／キャラ紹介／

名前：鈴風 松也

読み：すずかぜ しょうや

容姿：身長は雄二より少し低めで、黒髪にツンツンした感じの髪型、
（禁書の土御門を黒髪にした感じ）瞳は金色。

クラス：F

趣味：サンングラス集め・料理・ゲームや漫画

好きなもの（こと）：瑞希・母親・弟妹・明久・努力する人間

嫌いなもの（こと）：瑞希、母親、弟妹、明久を傷つける人間・努力する人間をバカにする人間

備考：いつもサンングラスを掛けているが、外すとヤクザ顔負けの目つきをしている。

なので中学時代は、不良に絡まれ、子供には泣かれと散々なこととなり、明久の勧めでサンングラスを掛けるようになった。家族構成：
母親・自分・弟・妹の構成

成績：Bクラス上位くらいだが、振り分け試験の時に体調を崩した姫路を保健室に連れて行くため無得点扱いとなる

召喚獣：見た目は松也をデフォした形で破戒僧の姿。武器は錫杖で

ある

腕輪：後のお楽しみ！

余話〱キャラ紹介〱（後書き）

設定を考えるのも骨が折れるな…

第六話（前書き）

都合により、Dクラス戦の件は省略します

では、さようなら。

第六話

「明久、宣戦布告してきたんだな」

その後、明久が宣戦布告の使者となり、心配になったため一緒について行くことにした

案の定、下位勢力の使者に暴力を振るうという噂は本当で襲いかかってきたが、

サングラスを外し睨みつけると、大半の生徒が怯んだので、その隙に逃げてきた

「一応、今日の午後に関戦予定と告げてきたけど」

「じゃあ先にお昼ご飯だな？ほら明久、今日のだ」

「ありがとう！松也」

「？吉井のお弁当って鈴風が作ってるのね？」

島田は驚いたように松也に尋ねた。

「いや、これはお袋が作ったもんだが？」

「菊さんの料理はいつもおいしいね！」

「ふうん、そうなの」

「ああ大体、去年の明久の食事は随分と酷かったからな」

島田が適当に相づちを打った後、去年の明久の食事環境は酷かった
といった

「いや……一応食べてたよ」

「あれは食べてると言えるのかの？」

「……お前の主食って水と塩だったろう？」

「失礼な！！きちんと砂糖も食べてたよ！」

「それは食べるとは言わんぞ明久」

「……………正確には舐めるが正解」

「まあ、飯代を遊びに使い込んだお前が悪かったからな……………」

「シツ仕送りが少なかったんだ！」

「趣味にお金かけ過ぎるからだ……」

「ところで雄二よ。1つ気になったんじゃが、どうしてAでもEでもなくDクラスなんじゃ？」弁当を食べて一休みした後、秀吉が今後の試召戦争のことについて聞いてきた

「色々理由はあるんだがEクラスは相手じゃないからだ。

姫路に問題のない今、正面からやりあってもEクラスには勝てる。

Aクラスが目標である以上、Eクラスなんかと戦っても意味がない
ってことだ」

「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「初陣だからな。派手にやって今後の景気づけにしたいだろ？」

それに、さっき言った打倒Aクラスの作戦における必要な布石だしな」

「あ、あの〜」

「ん？ どうした姫路」

「えっと、その。さっき言いかけたって

……………松也さんと明久さんと坂本くんは、

前から試召戦争について話し合ってたんですか？」

「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にとって松也と明久に相談されて」

「それはそうと！」

明久タイミングが悪いぞ。別にバレてもいいんじゃないか？」

「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

「負けるわけないさ」

明久を笑い飛ばす雄二

「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる

……いいか、お前ら。

ウチのクラスは 最強だ」

「良いわね。面白そうじゃない!」

「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり降ろしてやるつかの」

「……………(グッ)」

「が、頑張りますっ。し、松也くんもがんばりましょう!」

「ああ!当然だ!」

「頑張ろうね!松也に瑞希ちゃん」

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

そして、俺達は勝利のため雄二の作戦に耳を傾けた

第六話（後書き）

姫路の弁当の話がない！？

一体、どうなっていくんだか……

第七話

「先生！採点お願いします！」

「こつちもお願いします！」

「僕もお願いします！」

昼休みも過ぎて、いよいよDクラス戦が始まったが、松也と姫路と明久は振り分け試験を受けていないため無得点扱いとなっている

「松也と瑞希ちゃんは相変わらず速いよね」

「明久もずいぶん速くなったじゃないか？」

「そう？なら、うれしいなあ」

明久は松也と姫路の解答の速さを見て賞賛していたが、明久も去年よりも解答する速さが上がっているというと明久は嬉しがっていた

「ですけど、本当にDクラスに勝てるんですか？」

「あの雄二が勝算もなしに戦争を仕掛けないだろう？」

「で、ですけど……」「まあ、オレ達はあいつを信じて先ずはテス

トを終わらせとこうぜ」

「うん、そうだね」

Dクラスに勝てるか不安になっていた姫路を松也が落ち着かせ、テストは続いていった

ピンポンパンポーン！

しばらくテストをしていると放送を告げるチャイムが鳴った

《船越先生、船越先生》

「この声は須川くん？」

「雄二の作戦じゃないのか？」

オレと明久が不思議に思う間も放送が続いていく

《吉井明久が体育館裏で待っています》

「え？」

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

「須川あああああ！！！」

「吉井君、テスト中なので静かにして下さい」

明久の怒りの叫びが響いた

無理もない、船越女史は婚期を逃して焦りに焦った挙げ句、単位を盾に生徒に交際を迫るといふこの学園で一、二を争う危険な先生なのだ

『おい、聞いたか今の放送！』

『ああ。Fクラスの連中本気で勝ちに来てるぞ！』

『あんなに確固たる意志を持っている奴らに勝てるのか……？』

遠くの方からDクラスの奴らが動揺する声が聞こえてきた

『皆、吉井の死を無駄にするな!』

『絶対に勝つぞー!』

『吉井、骨は拾ってやるからな!』

Fクラスの奴らの士気がうなぎ上りのようだ

その前にまだ、明久は死んでないんだがな

テストも受け終わり、

オレ達は雄二の所に来ていた

「シャアアアツ!」

雄二を目に捉えると同時に明久は襲いかかっていった

「お、船越先生」

………凄いな。

雄二が言った瞬間に明久が掃除用具のロッカーに入って行った

「さて、バカは放っておいて、そろそろ決着をつけにいくぞ！」

『おオ~~~~~!!』

いよいよDクラス戦も終わりに近づいてきた

ちなみに、ロッカーで怯えている明久をなんとか落ち着かせ、松也、
姫路と共に戦場へと向かった

第七話（後書き）

なかなか物語が進みません…

第八話（前書き）

黒炉様

感想ありがとうございます

第八話

「下校している連中に上手く溶け込め！ 取り囲んで多対1の状況を作るんだ！」

雄二の声が響く、どうやらゲリラ戦に持ち込むようだ

『そつちから、周り込め！ 俺はこいつに数学勝負を申し込む！』

『なら、俺は古典勝負を！』

『よし、日本史で！』

Dクラスの連中を取り囲み、Fクラスのメンバーが次々に倒していく

『Dクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声が響き、ますます士気があがっていく

『援護に来た！みんな、もう大丈夫だ！ 落ち着いて取り囲まれなように周囲を見て動け！』

よく響く声が聞こえた

Dクラス代表の平賀である

『Dクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ!』

いよいよ初の戦闘の始まりだ

「準備はいいな、明久?」

「もちろんだよ!」

そう言うと明久とオレは戦場へと飛び出した。

「Fクラス撤退だ!分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ!」

『逃がすな! 個人戦ならそうは負けない! 追いつめるんだ!』

雄二の退却命令にFクラス一同は下がり始めた

『本隊の半分はFクラス代表の坂本を追え! 残りは包囲されている者を救出だ!』

平賀の号令の下、あつというまに雄二を中心としたFクラス本隊はDクラスメンバーに囲まれてしまった

だがそのためにDクラス本隊に隙が出来てしまった

「いくぞ明久！」

「わかったよ松也！」

「Fクラス 鈴風松也・吉井明久が近衛隊の六人に日本史で勝負を申し込む！」

「え!?!」

「「^{サモン}試獣召喚！」」

「し、^{サモン}試獣召喚!?!」

明久の召喚獣は改造学ランに木刀という不良のような姿を

松也は、法衣を着て数珠を首から下げた姿は僧侶の見えるが

ボサボサな髪とサングラスが相まって、まるで破戒僧のような姿の召喚獣だ

そのすぐ後に点数が表示された

《Fクラス 鈴風松也 吉井明久 日本史 316点 159点
VS

Dクラス 近衛隊X6 平均94点》

『なんだあの点数!?!』

『本当にFクラスか!?!』

「よそ見してる暇は…」

「「ない!?!」」

Dクラス生徒が驚いている隙に松也達は襲いかかった

『ちくしょー!なんであたんねんだ!?!』

『とにかく代表はいつたん下がって!』

なかなか攻撃が当たらないことに焦りを感じたのか徐々に後退し始めた

だが、前に集中するあまりに後ろから来る少女に気づいていないようだ

『あ、あの…』

少し離れたところで、平賀の後ろから、申し訳無さそうに姫路が声をかけていた

『え？姫路さん。どうしたんですか？Aクラスはこの廊下を通らないし、今は戦争中なんで…』

『は、はい、それですね…』

未だに現状を把握出来てない平賀と、もじもじと言いつらそうに姫路はいった

『え、Fクラスの姫路瑞希です。えっと、宜しくお願いします』

『あ、こちらこそ』

(おい、敵に挨拶してどうするんだ瑞希!?)

『その……Dクラス代表の平賀君に現代国語勝負を申し込みます』

『はあ……どうも』

『あの、えっと……さ、試獣召喚です！』

『え？あ、あれ？』

平賀は今更気付いたようだがもう遅い

《現代国語 Fクラス 姫路瑞希 349点

VS

Dクラス 平賀源二 129点》

『し、ごめんなさいっ』

姫路は大剣を軽々と振り回し、平賀の召喚獣をあっさり斬り捨ててしまった

こうしてFクラス対Dクラスの試召戦争は終了した

第八話（後書き）

甘々なシーンなんて書けるんだろうか………？

アドバイスなどあったら教えて下さい

第九話（前書き）

前書きはなにをかいたらいいんだろうか？

第九話

Fクラス勝利という知らせにFクラス生徒は歓声をDクラス生徒は悲鳴をあげていた

「ま、まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

平賀は信じらんないという顔で膝をついていた

そんな平賀をクラスメイト達は慰めていた

「あ、その、さっきはすみません……」

違う方向から瑞希ちゃんも駆け寄って謝る

「いや、謝ることはない。全てFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ。まあ、吉井君の成績が上がっていたのは驚いたが…」

ルールに則ってクラスを明け渡そう。ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか坂本？」

「いや、その必要はない」

平賀は今後の設備移動について聞いたが、雄二は断った

「え？なぜだ？」

「Dクラスの設備を奪う気はない、俺達の目標はあくまでもAクラスだ」

打倒Aクラス。これがオレ達の目指すものだ

「それは有り難いが……。それでいいのか？」

「勿論、条件がある」

「……一応聞かせて貰おうか」

「何、そんなに大した事じゃない。俺が指示をだしたら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

雄二が指したのはDクラスの窓の外にある室外機。但し、それはDクラスの物ではなく、Bクラスのものだ

「Bクラスの室外機か？」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性はあるだろうが、そう悪い取引じゃないだろう？」

「それは此方としては願ってもない提案だが、何故そんな事を？」

「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。では此方は有り難くその提案を吞ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう帰って良いぞ」

「ああ。有り難う。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

「ははっ。無理するなよ。勝てっこないと思っっているだろ？」

「それはそつだ。AクラスにFクラスが勝てるかどうか……まあ、応援するよ」

「じゃあ、と手を挙げてDクラス代表、平賀源二は去っていった

「それじゃあ僕たちも帰ろうか」

「そつですね」

戦後対談も終わり、松也達は帰りの準備をしていた

「悪い、この後用事があるから先に行つててくれ」

「用事？なにかあつたの？」

明久はどうやら忘れていているようだ

「船越先生を説得しに行くんだよ」

「！？……………（ガタガタツブルブルッ）」

「あ、明久くんしっかりして下さい！大丈夫ですから。ね？」

思い出したようで顔を青ざめ、体を震わせる明久。それを姫路が落ち着かせていた

「あとのことは俺に任せてくれ。瑞希のこと頼んだぞ？」

「……………うん、そうするよ。」

……………松也、無事に帰ってきてね」

「ああ、だって俺…」

帰ったらお袋の手料理を食べるんだから!！」

「やめて!そんなフラグたてないで!って行っちゃった……」

果たして松也の運命は!

第九話（後書き）

まさかの死亡フラグ！

はたしてどうなるんだ！

第十話（前書き）

更新が遅れました

どうぞ

第十話

（明久 side）

「おはよう瑞希ちゃん」

次の日、学校に向かってると瑞希ちゃんが先を歩いてたんで声をかけた

「あ、明久くん、おはようございます…」

？なんか落ち込んでるみたいだな

ん？そういえば、松也が見当たらない…

ま、

まさか……

「松也に何かあったの!？」

「はい実は今朝、松也くんのお家に行つたのですが……」

お、お義母さん／＼の話では昨日、ボロボロになって帰ってきたからもう少し寝かせておくと言っていました／＼」

松也……

無事に帰ってこれたんだね……

ちなみに松也の母親と瑞希ちゃんの両親は二人の交際を認めており、
家族公認というわけだ

「それじゃあ、松也は後から来るんだね？なら、僕たちは先に行こ
うか」

「はい、そうですね。」

こうして僕たちは学校に向かった

（side out）

「……………」（チーン）

今は回復試験が一段落ついて昼休みである

松也は昨日の疲れもあってか、机の上に倒れていた

「松也、昼休みだよ」

「……そうだな……」

「よし、昼飯でも食いに行くぞ！ 今日ラーメンとカツ丼とカレーと炒飯にすっかな？」

「どんだけ食う気だよ……まあ、オレも弁当忘れたし一緒に行くか」

「それじゃあ僕も」

雄二が学食に行こうとするいつものメンバーも一緒に行くことに

「あ、あの」

ゾワッ！！

その瞬間、明久と松也は背中に妙な寒気を感じた

「なんじゃ、姫路よ？」

「え、えつと。お昼なんですけど、私のを食べませんか……………」

「もしかして弁当か？」

「はっはい、迷惑じゃなかったらどうぞ！」

「迷惑なもんか！なあ、明久に松也…って何震えてるんだ？」

「な、なんでもないよね！松也！」

「あ、ああ、そうだよなあ！明久！」

「おぬしらのその姿を見ても全く説得力がないのじゃが…」

明久と松也は顔を青ざめ、体を震わせており、見てる方は不思議がっていた

「せつかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなく屋上にも行くかのう」

「だ、だったらお前ら先に行つてくれ」

「ん？松也はどっか行くのか？」

「の、飲み物でも買ってくる。ぜ、全員お茶で良いよな？」

「ああ、良いぞ」

「なら僕も行くよ！！ひ、1人じゃ持ちきれないでしょ？」

「きちんとお前たちの分はとっておくよ」

「「お、おかまいなく！！」「」

こうして明久と松也はお茶を買いに、姫路達は屋上へと向かった

「瑞希ちゃんのお弁当、美味しくなったのよね……」

「ああ、そうだな。美味しくはなったが、まだまだ慣れんな……」

「そうだね……」

実は中学時代に姫路の弁当を松也が食べたのだが、食べた瞬間に意識を失った

次に目を覚ましたのは、その日から三日後のことだった

姫路の料理が原因だと聞いた松也の母親が、試しに料理の”さしすせそ”を聞いたところ

答えはすべて薬品の名前だった

それで早速、姫路の料理を直そうと明久も加えて料理教室を開いたが
結果は惨憺たるものだった

松也の母親は某プロボクサーの様な格好で燃え尽きており、明久と
松也はそれから一週間寝込んでしまった

だが、苦勞の末になんとか直すことはできた

ある『欠点』を残しては……

屋上に着くとみんな楽しそうに姫路の料理を食べていた

「おう、お前ら遅かったな」

「あんた達のはちゃんとあるからね」

「「ありがとう……」」

「皆さん、デザートもあるんですよ」

「デザートもか……」

「それはありがたいのじゃ」

「……………」

姫路はカバンからゼリーの入ったカップを取り出し、四人に渡した

だが、ここで明久と松也は驚いたような顔をした

「瑞希……………これは前に作ったことあるか？」

「いいえ、初めてです」

初めてです

……………はじめてです

……………ハジメテデス

「全員、今持っているモノを下に置くんだ!!」

「は、早くみんな下に置いて!でないと大変なことに!?!」

姫路の言葉を聞いた途端、二人は大声を出した

「何そんなに慌ててるんだ？」

「……………まさか、独り占めにする気が」

「そうはいかないわよ」

「そんなにうまいのかの？」

みんなは止めているのはゼリーを独り占めにしたいのだと勘違いしているようだ

「じゃあ、お先に（パクッ）」

「……………（パクッ）」

「ああ！ゆ、雄二ー！」

「ムツツリー二ー！」

「だから、何よさっきから慌て

ボタン×2

ガタガタッ×2

て…って、え？」

倒れた音のした方を見ると体を小刻みに震わせて口から泡を吐いている

雄二とムツツリーニの姿があった

「ゆ、雄二！しっかりして！」

「ムツツリーニ！大丈夫か！とにかく島田！下の購買に行つてあるだけお茶を買つてこい！」

「わ、分かつたわ！」

この光景に秀吉はカップを置き震えだし、姫路は何が起こつたか分からないうつだ

しばらくの間、屋上は騒がしかった

〈余談〉

「そつえばさ」

「なんだ？」

お茶も買い、屋上に向かってしていると明久が松也に話しかけていた

「昨日、船越先生になんて言っただけで諦めさせたの？」

「ああ、そのことか……」

松也が遠い目をした

「最初に体育館裏に行った時『別の名前を出したのは恥ずかしかったからね！』なんて言っただけで襲いかかれてな……」

そのままリアル鬼ごっこをしたんだが、何とか落ち着かせて、今度いい生徒を紹介するってことで退いてくれたよ……」

「松也………ありがとう！」

明久は英雄に向かって心から礼を言った

第十話（後書き）

姫路の料理はやはり！！

はたして、その真相は！！

第十一話（前書き）

遂に姫路の料理が明らかに！！

第十一話

「二人とも大丈夫か？」

「ああ、なんとかかな」

「……………死ぬかと思った……………」

その後、必至の救急処置によりなんとか二人は助かった

「あれはいつたい……………」

島田は未だに何が起こったか分からないようだ

「瑞希ちゃんは最初、料理ができなかったんだ」

「なんだ不味かったのか？」

「黒こげの方がまだマシだ。瑞希は何故か薬品を入れてくる」

「や、薬品だと!？」

この発言に一同は再度、顔を青ざめた

「お袋と明久のおかげで食えるくらいにはなっただが、

”あるところ”だけは未だに直らないんだよな」

「なんだ？あるところって？」

「瑞希ちゃんはね、何故か初めて料理するモノに限って薬品を使うんだ」

「ああ、しかもある程度教えたモノじゃないとこれは続くしな……

ちなみに毎回、注意してはいるが、目を離すとすぐに入れようとするんだ」

「本当にすみません……」

「……………」

「こ、怖いわね瑞希は……」

「……………恐ろしい」

「次からは気を付けるようにするかの……」

みんな今後は用心深くなるだろう

「それよりさ。次の作戦を話そうよ」

「そうだな」

「ところで雄二よ、次はBクラスなのかの？」

「ああそうだ」

「……………目標はAクラスでは？」

「正直に言おう。どんな作戦でもうちの戦力じゃAクラスには勝てやしない」

雄二らしくもない降伏宣言

まあ、うちのクラスを見るとそうなるな

「それじゃあ、ウチらの最終目標はBクラスに変えるって事？」

「いいや、そんな事はない。Aクラスをやる」

「それってどういふことですか？」

「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込もうと思う」

「一騎討ちに？どいふこと？」

「Bクラスを使う。」

下位クラスが負けたらどうなるか明久、知っているな？」

「え！？えーと・・・」

そこに姫路が明久にどうなるか説明していた

「つまりはBクラスならCクラスの設備になるわけだ」

「逆に上位クラスが負けたら設備が入れ替わるんだぞ？」

覚えておけよ明久」

「うん、わかった」

「交渉内容については考えてある。俺に任せてくれ」

「じゃがな、それでも問題はあるじゃろう。そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？」

「そうだね。瑞希ちゃんがいることは既に知られているだろうし」

「それに関しても考えがある、心配するな。とにかくBクラスをやるぞ！細かいことはその後だ」

『了解』

「よし、明久」

「？」

「今日のテストが終わったらBクラスに行つて宣戦布告して来い。時間は明日の正午からだ」

「ヤダよ！雄二が行けばいいじゃないか？」

「いいから行つてこい。大丈夫だ……半分は」

「半分つて何！？」

「明久、俺も行つてやるよ。確認しときたいことがあるから……」

「確認？なんかあるのか？」

「なぐに、ちょっと見かけたただだからな、確認が取れたら知らせるわ」

「ああ、分かった」

こうして、昼休みは終わった

第十一話（後書き）

次回からいよいよBクラス戦です

第十二話(前書き)

いよいよBクラス戦開始!

第十二話

次の日の午後

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

教壇に立ち、雄二が机に手を置いて皆の方を向いた

「午後からはBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、やる気は十分か？」

『おおー！ー！ー！』

「さて今回は姫路に前線に出てもら

姫路、しっかり頼むぞ」

「が、頑張ります！」

『いよっしやあぁー！ー！ー！』
『』
『』
『』
『』

《キーン！コーン！カーン！コーン！》

そこでチャイムが鳴り響いた

「野郎共、きつちり死んで来い！」

『『『『『おッー—————!!———』』』』』

「行ってこい!! 目指すはシステムデスクだ!!」

『『『『『うおおー—————!!———』』』』』

みんな教室から出て行った

「瑞希がんばって来いよ！」

「あれ？松也くんはどうするんですか？」

「俺は教室で待機だからな」

「そうなんですか……」

松也が前線に行かないと聞き、姫路は落ち込みだした

ポンッ

「？」

ナデナデ

「大丈夫だ、もし瑞希がピンチになったらすぐに行くからな
だから落ち込むなよ」

「！……はい！がんばってきます！」

松也に頭を撫でてもらったためか、満面の笑顔で姫路は戦線へと向
かった

「さて、これからのことでも考えるか？雄二」

「そうだな… Bクラスの代表が、”あの”根本ならな」

根本恭二

悪い噂しか聞かない奴だ、今回は警戒してあえて教室に残る事にした

「……………何も起きないよな？……………」

『失礼するぞ』

しばらく経つと誰かが現れた

俺は後ろの方におり、雄二が話し始めた

『誰だ？』

『Bクラスの使者で来た』

『使者だと？』

『ウチの代表が一時停戦協定を結びたいそうだ』

『……停戦協定か………分かった、応じよう』

『分かった、俺たちは視聴覚室にいるからな』

『ああ、後から行くと伝えとけ』

Bクラス生徒は戻っていった

「雄二、なんで停戦なんて結ぶんだ？」

「姫路の体力を考えると明日に持ち越した方が都合がいいからな」

「なるほどな」

「それでだ、お前は一緒に来るか？」

「いや、俺は一応教室に残る。行ってる間に教室で待ち伏せされるって可能性もあるからな」

「そうだな…それじゃあ行ってくるわ」

「ああ、気を付けろよ」

「お前もな」

雄二は数人連れて視聴覚室に向かった

『本当に大丈夫なんだろうな？』

『根本のことだ。大丈夫だろ』

『そうだな』

雄二達が教室から出て、しばらくすると数名の生徒が入って来た
松也は見つからないように掃除用具のロッカーに隠れている

『さっさと済ませようぜ!』

バキッ! バンッ!

そして、その内の一人が一台のちゃぶ台を壊すと同時に松也がロッカーから出てきた

『!!!』

「見たぞ、見たぞ」 え〜と、ひい…ふう…みい…全部で5人か」

『な、なんで人がいるんだよ!』

『知るか!それより先生に知らされたらやばいぞ!』

『そうだな…恨みはねえが大人しくしてもらおう!』

そう言って一人が殴りかかってきた

「はい正当防衛、成立…っと！」

『ガハッ！』

松也はカウンターで逆に殴り飛ばした

「どづした？この程度か？」

『この野郎…！』

『なめやがって…！』

二人ほど怒りを露わにさせながら、松也に殴りかかるうとしたとき

「貴様等そこで何をやっている…！」

『『げ、鉄人！？』』

「……………ちょうどいい」

西村教諭が教室に入ってきた

「鈴風、これはどうゆうことだ？」

「どうゆうことって、そこにいる奴等がこの設備を壊すのを見つけたんですが、

いきなり襲いかかってきたんですよ？」

「ほく、そうなのか貴様等？」

西村教諭は振り向き、Bクラス生徒に尋ねた

『い、言い掛かりです！』

『確かに俺たちはここに入ったが、それは戦争しているからだ！』

『なのに、そいつがいきなり殴りかかってきたんです！』

「と、向こうは言っているが？」

西村教諭は再度こちらを向いて尋ねた

確かにこちらは一人、あちらは複数、証言の数でこちらが負けている
現に自分達が有利と知ってか、西村教諭の後ろでイヤな笑みを浮か
べている

が、

こちらには切り札がある

「ちょっと待ってくださいよ」

『『』「?」?』』』

松也は教室の窓側の隅へと向かった

そして、そこにあるカバンから

「よつと」

『『』「!」!』』』

ビデオカメラを取り出した

「これを見せてくれますか?」

そこには、先程のやりとりが映し出されていた

「……さて、なにか言い訳はあるか?」

『ほ、補習はイヤだ!』』

『助けてくれ!』

『お母ちゃん!』

「……………これは証拠と校則違反ということで預かるぞ」

「分かりました」

そうゆうとBクラス生徒を連れて行ってしまった

第十二話（後書き）

もっと、文章力を上げたい……

第十三話（前書き）

連日投稿

第十三話

「おう明久に秀吉、戦況はどうだ？」

西村教諭が去ってしばらくすると明久達が戻ってきた

「なんとか渡り廊下を抑えたよ」

「ところでお主一人でどうしたのじゃ？」

「雄二達は停戦協定を結びにいつて、俺は留守番ってわけだ」

「停戦協定？」

「実はな……（説明中）……というわけだ」

「なるほど（のう）」

「……お前等何してんだ？」

どうやら雄二達も戻ってきたようだ

「僕達はBクラスの代表が根本だって知って、心配になって戻ってきたんだ」

「そうか、まあ松也の報告で知ってはいたがな」

「え？そうなの？」

「じゃから松也は来なかったのかの？」

「ああ、予想通り嫌がらせで設備を壊そうとしてたが、返り討ちにしておいた」

「そうか、ご苦労だったな」

「お構いなく」

その後、しばらく話し合いは続いた

「「大変だ!!」」

「どうしたんだ一体？」

「何かあったのか？」

「島田が人質に捕られた！」 須川

「こっちは姫路さんが！」 近藤

『『『なに！！？』』』』

二人の知らせを聞き、教室が騒然となった

話は数分前にさかのぼる

SIDE 瑞希

なんで松也は来なかったんでしょうか…

き、きつと大切な作戦があるからです！

そうです。そうに決まっています…

『……………』

？何か話し声が聞こえますが…何を話してるんでしょうか？

『……………おい…れ本当か？』

『ああ間違いない、さっきFクラス教室に突入した奴等から聞いたが、鈴風ってやつが大怪我したらしい』

え！？

松也くんが怪我を！

『それで、そいつどうなったんだ？』

『さあな、確か保健室に行ったはずだがな、それより戦争中だろ？』

『そつだな』

保健室ですね！！

すぐに行かないと！！！！

「あ、あのすみません。ちょっと行ってきます!」

『え!?! 姫路さん!』

姫路は急いで保健室へと向かった

後ろから来る影に気づかず……

S I D E O U T

「なんで島田さんと瑞希ちゃんが人質に!」

「そつだ! どういうことだ!」

「落ち着けお前等!」

「そつじゃぞ! ひとまず訳を聞かなくては話にもならんぞ!」

雄二達にいさめられて、ようやく明久と松也は落ち着いた

「そっだね…」

「すまん、取り乱して……で、どういう状況なんだ？須川に近藤」

『どつもどつも、いきなり島田が走り出してどこか行ってしまったわ…』

『そのすぐ後に、姫路さんも後を追う様に…』

「……………その後には捕まったのか……………」

「とにかく、明久と秀吉は須川ともう一人を連れて島田の方へ、悪いが松也は近藤と二人だけで姫路の方を頼む」

「いいか、できるだけ早く助け出せ!!」

『『『了解!!』』』

こうして松也達は戦場へと向かった

第十三話（後書き）

まさかの姫路が人質に！

果たしてどうなるのか！

第十四話（前書き）

更新が遅れました！

果たして姫路はどうなるのか！

第十四話

『そこで止まれ!』

『それ以上来たら、止めを刺して補修室送りにするぜ!』

ここは二階の渡り廊下、松也と近藤は姫路を捕らえている二人と対峙していた

よく見ると姫路の点数は一桁しかなかった

「松也くん……」

姫路は両手を捕まれており、目に涙を溜めて松也達を見つめた

(近藤、頼む)

(分かった)

俺たちは現在開発中のアイコンタクト(鉄人対策のため)をする

「おいおい、人質取ったくらいでいい気になるなよ?」

『はん！その余裕がいつまで続くかな？』

「お前等が倒れるまで続くが？」

『^{バカ}Fクラスのクセに調子のもってんじゃねーよ！！』

カチャッ……………

ギロツ！！

「調子にのってんのはテメー等の方だ！！」

『！？』

ガタガタッ

ブルブルッ

松也の目を見て、Bクラスの生徒は震え始めた

無理もない……

今の松也は目の白い部分が充血し……

金色の瞳と合わさって……

それはまるで……

………悪魔のような目をしているのだから

「近藤、今だ!！」

「おう!、試獣^{サモン}召喚!」
『な!?!』

『いつの間に!』

松也に氣をとられているうちに、背後に回っていた近藤が姫路と姫路の召喚獣を助け出していた

「近藤!そのまま瑞希を頼む!」

「まかせろ!」

近藤は姫路を庇うように立った

「……さて、覚悟はできてるよな……」

松也はさっきよりも鋭い眼差しで戦闘準備に入った

『ひい、た、助けてくれ』

『お、お、お願いだ』

が、Bクラスの二人は松也に睨まれたことにより既に戦意を失っていた

「……………許す気はねえよ!!」

『ぎゃああ~~~~!!』
『』

松也は二人を倒すと何処かから現れた西村教諭に任せて、姫路達と一緒に教室へと向かった

「大丈夫か瑞希？」

松也と姫路は教室に向かっていた

ちなみに近藤には救出成功の知らせを頼み、先に行かせた

「……………」

姫路は救出されてから一言も喋らない

「おい、どうしたんだ？」

「松也くん……………」
「ごめんなさい」

「？」

そついうと姫路はその場で頭を下げた

「松也くんの……………」
「力にな……………」

なることがで……………」
「できなくて……………」
「それに……………」

それに、足を引っ張るようなことを……………」
「……………」

「瑞希……」

姫路はその場で泣き始めた

「ごめんなさい……ごめんなさい……ごめ」

「瑞希」

ギョツ

「ひゃあ／＼／」

松也が姫路を抱きしめると驚いたような声をあげた

「瑞希、お前が気に病む事じゃないよ」

「で、でも……」

「それに言っただろ？『ピンチになったら行く』って、だから気にするな」

「……はい」

姫路は目に涙を溜めたまま笑みを浮かべた

「それじゃあ、さっさと教室に戻るか。みんなが待ってるからな」

「はい」

松也と姫路は足早に教室へと向かった

仲良く手をつないで…

教室に戻り、その光景を見たFFF団は松也に襲いかかったが、松也により地に沈んだ

第十四話（後書き）

ね、この後どうするか……

第十五話（前書き）

いよいよBクラス戦が終わります

第十五話

「失礼するぞ」

その後、教室で休憩していたが、ムツツリーニからCクラスの動きが怪しいという知らせを受け、雄二は主要メンバーを連れてCクラスに来ていた

「Cクラス代表はいるか？」

『Cクラス代表は私だけだ』

そついうとCクラス代表の小山友香は前に出てきた

「?……あの松也くん？」

「どうしたんだ、瑞希？」

雄二が交渉している間、着いてきた松也達は雑談していると姫路が話しかけてきた

「あそこのカーテンの所に誰かいるように見えるんですが……」

「…なに？」

姫路の指さす方を見ると確かに誰か隠れているようだ

(誰か隠れてるみたいだが……………！確かこの代表は！)

『それで何しに来たのかしら？』

「そうだったな、実は…」

(まずい！)

〔クラスと不可侵じよ』雄二ー！』……………どうしたんだ松也？〕

これから不可侵条約を結ぼうとした雄二だったが、松也に呼ばれ不機嫌そうに振り向いた

「雄二、これは畏だ！」

「畏だと、どういうことなんだ？」

「なあ、そうだろ……………根本」

「なに！？」

松也はカーテンの方を見るとみんなの目はそこに集まった

すると、そこから根本とBクラス生徒が十名程出てきた

「前に噂でお前に彼女がいるって聞いてな、確かここの代表がそう
だったる？」

『なんだと！』

『彼女持ちだと！』

『異端者だ！』

それを聞き、Fクラス生徒が根本に襲いかかろうとした

「待て、今は停戦中だ！後日、思う存分やっていいぞ！」

『分かった』

一先ず落ち着かせて根本達の方を向く

根本達は教室から出ようとしていた

「待て根本」

「チツ、なんだよ」

根本は舌打ちして、こちらを向いた

「なに、どうせならここで決着をつけねえか？」

『『なに!?!』』

両クラスから驚きの声があがる

「おい！いきなり何を言い出すんだ！」

「怒るなよ雄二、ちゃんと考えているから」

「ハッハッハッ！Fクラスが勝てると思ってるのか？」

「は？勝てるが？」

「なめやがって！」

「そうかい、それじゃあ再戦していいんだな？」

「いいだろう…叩きのめしてやる！」

「長谷川先生、停戦協定を無しにして再戦してもいいですか？」

『許可します』

こうして、Bクラス戦が再び始まった

『坂本を狙え！雑魚は構うな！』

開戦すると同時に根本は下がりながら命令を出した

「松也！作戦なんてあるの？」

「ああ、とにかく明久以外は下がっててくれ！

いくぞ明久！」

「うん！」

「まず、俺が足止めする！」

Fクラス 鈴風松也がBクラス全員に数学で勝負を申し込む

試獣^{サモン}召喚！」

『甘く見やがって！』

『いくぞ！試獣^{サモン}召喚』

『『『試獣^{サモン}召喚！』』』

《Fクラス 鈴風松也 数学 411点

VS

Dクラス モブ×10 数学 平均218点》

『な、なんだ！あの点数！』

『本当にFクラスか？』

(あれ？前にも聞いたような…)

『怯むな！相手は一人だけだ！』

『そうだ、一斉にかかれ！』

Bクラス全員が襲いかかってきた

「さて……腕輪発動！」

松也がそういつと松也の召喚獣がサングラスを外してBクラス生徒を見た

すると

『おい、動かせねえぞ！』

『どうなってるんだ！』

Bクラス全員の召喚獣が動かなくなった

「これが、俺の腕輪の能力『石化』だ

見た相手すべてを石にしてしまう

だから、味方も石にしちまうから面倒なんだよな」

松也がそう言い、松也の召喚獣はサングラスをかけ直した

「明久、こいつ等はあと数分は動けない

その内に根本を討ち取れ！」

「分かった！」

Fクラス 吉井明久が根本君に数学で勝負を申し込む！

試^{サモン}獣召喚！」

「ちくしょう！試^{サモン}獣召喚！」

その後、明久が根本を討ち取り、戦争は終結した

第十五話（後書き）

腕輪がとうとうできました！

このあとの応用はいろいろ……

第十六話（前書き）

Bクラス戦が終わりました

根本がひどい目にあつ予定です

第十六話

「……俺がDクラスに出した条件はなんだったんだ」

「まあ、その、なんだ、すまん」

雄二はDクラスに出した条件が意味を為さなくなり落ち込み、松也は気まずそうに謝った

「はあ、さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談と行くか

な、負け組代表？」

「……」

雄二の視線の先には、先ほどまでの強気だった根元が床に座り込んでいた

余程、明久に負けたのが響いているのだろう

「本来なら設備を明け渡して、お前らに素敵な卓袱台をプレゼントする所だが、特別に免除してやらんでもない」

雄二の発言に対して、Fクラスが騒ぎ始めた

「落ち着け、前にも言ったが、俺達の目標はAクラスだ

ここは通過点でしかないをだ」

「ああ。だから、Bクラスが条件を呑めば解放してやるつもり
いる」

「……条件はなんだ？」

「条件？ それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やってくれたし、正直去年から目ざ
わりだったんだ」

「そこで取引だ。Aクラスに行って試召戦争の準備が出来ると宣
言して来い」

そうすれば今回は設備については見逃してやっても良い

ただし、宣戦布告はするな。

すると戦争が避けられないから、あくまで戦争の意思と準備がある
とだけ伝えるんだ」

「……それだけでいいのか？」

「ああ、それだけで『待て雄二』今度はなんだ？」

「いい物があるから少しだけ待っててくれ」

そう言つと松也は教室から出て行った

数分後、松也は何かが入った鞆を持ってやってきた

「なんだそれは？」

「まあ見てるよ、さて、Bクラスの代表がコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃してもいいぞ」

そう言つて松也は鞆からチャイナ服を取り出した

「おいおい、それどうしたんだ？」

「先輩から貰つてきたんだ、失敗作だから、使い終わったら捨てていいつてよ」

「確かにこいつが着たのなんてだれも着たがらないだろうな」

「バ、バカな事を言うな！ この俺が、そんなふざけた事を！」

『Bクラス生徒全員で、必ず実行させよう!』

『任せろ! 必ずやらせる!』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はない!』

Bクラス面々はやる気満々だ

人望の無さがハッキリと分かるな…

「んじゃ、決定だな」

「くっ! よ、よるな変態

ドゴッ!

ぐふうっ!!--

『とりあえず、黙らせました』

「お、おう。ありがとう」

一瞬で代表を見限り腹部に拳を打ち込むBクラス男子生徒

あまりの変わり身の早さに、雄二もあっけにとられ、少し引いていた

「じゃあ、着付けに移るとするか。明久、手伝ってくれ」

「了解」

松也と明久はぐったりと倒れている根本に近づき、制服を脱がし始めた

「う、うう・・・」

うめき声を上げる根本

「おらっ!」

バキッ!

「がふっ!」

念のため起きないように追加攻撃をくわえておく

見慣れた男子の制服を脱がし、チャイナ服をあてがう

「うーん・・・これどうするんだ?」

「さあな、俺も知らんしな…」

『私がやってあげようか？』

Cクラスの女子の一人がそう提案してきた

「いいのか？悪いな。じゃあ、せっかくだし可愛くしてあげてくれよ」

『それは無理。土台が腐ってるから』

「じゃ、よろしく」

松也達は女子に任せてその場を後にした

「ねえ松也、この制服どうする？」

「俺に任せてくれ、いい考えがある」

明久から制服を受け取った松也は怖い笑みを浮かべていた

「1」この服やけに短いぞ」

ある用事をすませて、教室に向かっていると根本の声が聞こえたのでそちらを向いたが失敗だった

目をふさぎたくなるほど気持ちの悪い姿になっており、吐き気がした

『いいからキリキリ歩け!』

『さ、坂本と鈴風!よくも俺にこんなことを……』

『無駄口をたたくな!これから撮影会もあるからな、時間がないんだぞ!』

『き、聞いてないぞ!』

「よう根本、随分気持ち悪い姿になったな」

松也は吐き気を抑えながら根本達に話しかけた

「鈴風！テメエよくも…」

『どうしたんだ鈴風？』

「いやな、撮影会が終わったら根本をここに連れてってくれ」

松也はそう言い一枚のメモを渡した

『分かった。それだけか？』

「後もう一つある、ちょっと耳貸せ」

『？』

Bクラスの一人を呼び、小声で話し始めた

「いいか、根本を案内したら、すぐに逃げろ

……死にたくなかったらな」

『おいおい、何があるんだよ』

Bクラス生徒は笑い出したが

「……がいる」

ビクッ！

ブルブルッ

ある人物の名をいうと震え始めた

「いいな」

『……分かった。他のヤツにも言っとく』

「頼んだぞ」

言い終わると松也は教室に向かった

「あ、松也、何処に行ってたの？」

「野暮用さ、それより瑞希に明久、帰るか」

「そっだね」

「はい」

こうして松也達は帰って行った

〈余談〉

「本当にここに制服があるのか？」

根本は撮影会が終わり、制服を取りに旧校舎のとある教室に来ていた

『さつさと入れ』

「分かったよ…」

根本は教室に入っていった

『よし、逃げるぞ!』

『ああ、そうだな!』

根本を連れてきたBクラス生徒達は急いでその場を後にした

(ちくしょう!俺に恥をかかせやがって!

おかげで友香とは別れるはめになっちまった

どう復讐してやるつか…)

ガチャ

「?」

そんなことを考えていると鍵の閉まる音が聴こえ振り向くと

そこには

「あなたがそうなのね?」

船越先生がそこにいた

「な、なぜここに!」

「鈴風君から告白したい生徒がいるからここに待ってるように言われたのよ」

「あいつなんて事を!」

「さあ、愛し合いましょ」

「い、いやだ!来るな…」

ぎゃああ~~~~~!」

この日を境に根本は女装癖と熟女好きという噂がたったのは言ってもない

第十六話（後書き）

船越先生に喰われた根本

こうして、学園（特に男子）の平和は守られた

次回からいよいよAクラス戦！

第十七話(前書き)

いよいよAクラス戦へ

第十七話

「一騎打ち？」

「ああ、Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む」

補給試験も終えた翌日、松也達はAクラスに宣戦布告に来ていた

その前にAクラス代表の霧島翔子と雄二が幼なじみであることが判明し、一騒動あったのは別の話、

「うーん、なにが狙いなのか？」

「もちろんFクラスの勝利が狙いだね」

秀吉の双子の姉である、木下優子が交渉にでていた

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね」

だからと言ってわざわざリスクを冒す必要もないかな」

「賢明だな」

ところでBクラスとやりあう気はあるのか？」

「Bクラスって

……昨日のあの……」

昨日の根本の格好を思い出し顔を青ざめる優子

後ろを見るとAクラスの何人かは吐きそうになっていた

「そつだ。幸い宣戦布告してないみたいだが、どうなることやら」

「ちなみにBクラスとは『和平交渉にて終結』って形になってるからな」

「あと、BクラスだけじゃなくDクラスもだからね」

「……それって脅迫じゃない？」

「いや、ただの忠告だ」

「うーん……わかったわ。なにを企んでいるかは知らないけど、代表が負けるわけないから、その提案受けるわ」

「でも、こちらからも提案

代表同士の一騎打ちだけじゃなくて、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、ていうのなら受けてもいいわ」

「姫路がでる可能性の警戒か？」

「そうよ」

「その条件を呑んでもいい」

「ホント？」

「その代わり、勝負の内容はこちらで決めさせてもらおう」

「え？うん……」

「……受けてもいい」

「うおっ！？」

いきなり目の前に日本人形のような少女、霧島翔子が現れた

「……雄二の提案を受けてもいい」

「あれ？代表、いいの？」

「……そのかわり、条件がある」

「なんだ？」

「……負けた方はなんでも一つ言うことを聞く」

「わかった。交渉成立だ」

「え！？いいの!？」

「おい雄二、本当に大丈夫なのか？」

さすがに心配になり、松也が雄二に話しかけた

「なに、心配するな」

が雄二は余裕だとばかりに言った

「……勝負はいつ？」

「今日の午後からでいいか？」

「……わかった」

「じゃ、教室に戻るぞ」

交渉成立したので、みんなは教室へと戻っていった

〈余談〉

Fクラスメンバーが帰った後のAクラス教室での会話

「ね、ねえ、翔子……」

「……なに？」

翔子に話しかけた女子生徒は驚きの表情を浮かべていた

「雄二さんの左側にいた男の子の名前って分かる？」

「？……吉井のこと？」

ちなみにさっきの立ち位置は雄二を先頭に左が明久、右が松也という形である

「吉井くんっていうんだ……」

女子生徒は何かを想うように遠い目をした

その頬は少しだけ紅く染まっている

翔子は訳が分からずに首を傾げていた

第十七話（後書き）

果たしてこの女子は!？

第十八話（前書き）

洲鳴さん、感想ありがとうございました！

第十八話

「それでは二回戦の生徒は前にでて下さい」

午後からAクラス戦が開始され

今から二回戦が始まるうとしていた

ちなみに一回戦は優子対秀吉で行われ、秀吉も必死に応戦していたが
結果は優子の勝利として終わった

「僕が行くよ」

明久は立ち上がり、前へと歩いていった

Aクラスを見るとどうやら女子のようだ

肩までかかるぐらいのウェーブのかかった金髪に青い瞳、白い肌と
相まって、

まるで、フランス人形を思わせる姿だった

「あれ？キミって、確かあの時の？」

「はい、あの時はありがとうございました」

「ん？明久、知り合いか？」

「うん、ほら、この前話した……」

「ア〜キ〜」

ビクッ

声のした方を見ると美波とその後ろにFFF団が凶器を構えて立っていた

ちなみに人質の一件の後に明久達は名前で呼び合うようになったみたいだ

「え！なに、美波怖いよ！」

「あの子は誰よ！」

「誰って、この前、病院まで連れてった子だけど？」

「ああ、あの振り分け試験の日に助けた子か？」

「うん、元気そうで良かったね。え〜と……」

「まだ名乗っていませんでしたね」

私は^{すすきの}薄野 月美^{つきみ}です

「僕は吉井 明久っていうんだ。よろしくね、薄野さん」

「はい、よろしく願いします」

仲良く二人で自己紹介をしていたが

『なによアキは！』

『ちくしょう、吉井のくせに！』

『あの異端者が！！』

『……………裏切り者に死を！』

その後ろでは美波とFFF団+ムッツリーニから黒いオーラがでていた

「月美か？久し振りだな」

「うん、雄二くん久し振り」

そんななか雄二は月美に話しかけていた

「雄二、薄野さんのこと知ってるの？」

「ああ、翔子の従姉妹だ」

『総員、構え！』

雄二の言葉に先程の教室のようにみんなが一斉に構えた

だが、今回は上履きではなく

カッターであった

「待て！そんなもん投げようとするな！」

『黙れ！』

「英語でお願いします」

科目指定はAクラスが行った

ちなみに先程の一回戦は秀吉が指定した

「では、はじめて下さい」

「「サモン試獣召喚！！」」

こうして、二回戦が始まった

第十八話（後書き）

ついに少女が登場、果たして今後の展開は！

第十九話（前書き）

今回は連続投稿です

文章がかなり短いです

第十九話

「「サモン試獣召喚!!」」

月美の召喚獣は青いドレス（フランス人形の服を想像してもらいたい）を着て、

武器は…

『アレって、水晶玉か?』

『どろちゃって戦うんだ?』

占いなどでよく使われる水晶玉だった

「いくよ、薄野さん!」

「はい!」

そついうと明久は月美に向かっていった

「えっと……確かこうでしたね!」

キューーーーーン!!

「え?」

バキューーーーーン!!

「ぎゃああ~~~~!!体が燃えるように痛い~~~~!!」

「明久くん!」

姫路が明久に駆け寄ると

《Fクラス 吉井明久 英語 95点

VS

Aクラス 薄野月美 438点》

今更ながら点数が表示された

なにが起きたかというと

まだ、操作に慣れていない月美が腕輪を起動してビームを発射させたのだ

「え？よ、吉井くん大丈夫ですか？」

明久が観察処分者だと知らない月美は、なぜ明久が苦しんでいるのか分からないでいた

「薄野さん心配しなくてもいいよ」

「で、でも…」

「僕は大丈夫だから」

明久は不安そうな月美に笑顔を向けた

「は、はい／＼／＼」

その笑顔を見て月美は頬を紅く染めていた

「なあ、雄二。あれは完璧に…」

「惚れてるな…」

その様子に大半の者が月美が明久に好意を向けているのが分かった

「ただいまの勝負はAクラスの勝利です」

高橋先生の宣言で二回戦は終わった

第十九話（後書き）

いよいよネタがなくなってきた……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8304x/>

バカと色付き眼鏡と召喚獣

2011年12月1日23時51分発行